

—スペイン風邪、猛威を振るう—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

インフルエンザ、地球を駆け回る

大正7年(1918)早春、米国で発生したインフルエンザ(流行性感冒)は、翌8年にかけてスペイン、仏、英国などヨーロッパに広がり、「スペイン風邪」と呼ばれた。同時に中国、日本へも侵入し、全世界を覆い、空前絶後の惨禍となった。

日本での流行には3つの波があった。

第1波は、大正7年3、4月ごろ、日本に侵入し、初夏には止んだ。

第2波は、その年の9月中旬から10月上旬にかけて全国に広がった。これは過去数100年間の疫病のうち、最も劇的な大流行であった。

第3波は、翌大正8年1月下旬から2月にかけて日本中にまんえんした。

スペイン風邪による全世界の患者6億人、死者2,300万人。日本では国民の5人に2人に当たる2,100万人が発症し、約38万人が死亡したといわれる。

スペイン風邪、大阪で大暴れ

大阪府では、大正7年から8年にかけての死者約1万1,000人、患者数47万人に達し、明治19年のコレラの大流行に迫るもの



写真1 一心寺（大阪市天王寺区）

であった。代大阪府衛生会では、大正7年11月に感冒予防注意の大立看板を市内の各所に設置した。また、大阪市電などの電車内や停留所には次のような予防注意書を配布したり、掲示したりした。

①多数人の寄る所、ほこり立つ所へは行かぬがよろしい

②悪性感冒の病人には接近せぬように注意せられよ

③せきをするとき、ハンカチで口を覆い、また、たんを吐き散らさぬようになさい

④鼻毛をそらぬよう、また胃腸をこわさぬように用心せられよ

⑤日々丁寧にうがいをし、口内、のどを清潔にせられよ

⑥うがい液御入用の方は本会事務所へビール瓶お持ちあれば差し上げます

⑦食振るわず少しでも身体だるく、また熱あると思えば、早く医者に治療を受けられよ

以上は、80年前の注意事項である。昔も今も大筋としては同じだが、こういった心がけが予防の大切な一歩である。

大阪市天王寺区逢坂に「一心寺」という名刹がある。この境内に「大正八、九年流行感冒病死者の慰霊碑」がある。大正11年(1922)12月に建てたもので、施主は大阪市東区道修町の薬剤師小西久兵衛・同吉栄とある。



写真2 流感冒病死者慰霊碑

地球寒冷時代の惨禍だった

北半球では、1900年から1920年ごろまでは気温が低く、現在の温暖化時代よりも年平均で約1度も低かった。

日本では9大正7年の冬はかつてない大寒波・豪雪に襲われた。同年1月9日夜に

は新潟県南魚沼郡三俣村で雪崩があり、158人が約9mの雪中に埋没して死亡。同1月20日には山形県東田川郡大鳥鉾山で雪崩によって154人が死亡した。

東京でも大正7年1月の平均気温は1.6℃で、観測史上4番目に低い気温であった。

地球規模の寒さが、スペイン風邪を流行させた一因と考えられる。

寒さと乾燥がかぜを流行させる

かぜは、いわゆる普通のかぜとインフルエンザに大別される。最近の知見によると、かぜが冬に多いのは次の理由による。

①かぜは、ウィルスが引き起こす。多くのかぜのウィルスは、低温・低湿の寒い季節のほうが、夏よりも長時間生存できる。

②かぜのウィルスは、病人の鼻やのどから、くしゃみやせきによって飛び散り、室内を漂っているうちに他人に吸い込まれてさらに広がるという感染経路をたどる。

寒い季節は、窓を閉め切った室内に大勢の人が集まることが多いので、かぜのウィルスに感染する機会も多くなる。

③人の呼吸器の抵抗力は寒いと低下する傾向がある。

厚生省によると、97年秋から98年春にかけてのインフルエンザの患者は、ここ10年で最も多く、約127万人が病気にかかり、815人が亡くなったという。

防災関係者がインフルエンザにかかったら、防災活動に支障を来たす。39度近い発熱や9のどの痛み、頭痛、全身のだるさなどの症状が出たら早目に治療に専念したい。